

偽善か、それとも現場監督の不都合なのかどうだ」：
理に詰まったイワノフは直ちに了解した。

そして昼の休憩時ベーチカを囲んでいるソ連人に向かい「あなたたちは東京の歌を聞いたことがあるか」と言うとき、もちろんだれ一人知る者はなく「そりゃいい、ぜひ東京の歌を……」と所望したので「日本の兵隊が全員で合唱するので暖炉を日本人に囲ませてくれ」と、口伴奏により軍歌式に復唱し東京音頭を十番まで合唱したところ、コーラス好きのソ連人は監督以下大拍手喝采で、ソ連人にもまして喜んだのは日本人。十分の休憩が二十分となり、暖炉を囲んだ日本の兵士は顔を紅潮させて暖をとり、以来休憩の問題は解決した。

これがオックス作業の成果を収めていく因となり、
労務係中尉の笑顔を見るようになったのである。

しかしながら十二月中旬ともなれば気温は極度に下がり零下四十度を上下し、四十度を下る日もあり、凍土の厚みが増し、ノルマ五、八立方メートルの穴掘り作業等は困窮の度を加え、一日三百グラムのパンとどんぶり一杯の水スूप（中味のない）ではいかにして

も無茶苦茶の酷使である。

かくして昭和二十年も終わり二十一年の正月を迎えたが、郷愁の募る異国での新正であった。

収容所内各室の暖炉用燃料（牛馬の糞を乾燥して加工）はなくなり、収容所長に交渉するも「日本人が無計画で使用したからだ」の繰り返しだった。我々が震える夜を過ごした嚴冬の一月、二月であり、半年近くも無人浴のため痒々（かいかい）や夜、毛ジラミの襲撃に悩まされて身のおきどころに苦しんだのもこのころであった。

中央アジアバルハシ鉞山

苦闘粉塵吸入労働実記

北海道 渡辺健一

一、第一四八師団

私どもバルハシ戦友会は当時関東軍隷下各部隊にいた兵士ですが、終戦直後満州首都新京で再編成された

集成作業第一大隊、同第三大隊（三大隊の半分）計約千三百人が一梯団となって、抑留となったのが中央アジアガサフ共和国内バルハシ第三十七收容所でした。

正式に言うると第一四八師団（新京防衛軍、師団長末次中将）隷下歩兵三八三連隊から抽出した千人が集成一大隊です。（大隊長、鈴木大尉）私は三中第一小隊長（少尉）でした。同じ師団の歩兵三八五連隊から抽出された七百人が集成第三大隊（大隊長、佐田大尉）で、その後二分され四百人は集成十大隊へ併合しウラシムアへ、三百人は我が集成一大隊へ併合となり、ともにバルハシへ抑留となったわけです。

第一四八師団は新設師団で、同司令部（三八一と呼称）独混旅司令部（三八二）、歩一（三八三）、歩二（三八四）、歩三（三八五）、挺身大隊（三八六）、砲兵連隊（三八七以下順に）、工兵、輜重、通信、病馬廠、兵器勤務隊、と軍隊序列制の下に編成されておりましたが、停戦後千五百人くらいの集成大隊に改編し、それぞれ梯団を組んで捕虜列車にすし詰めとなり移動し、おのおのに收容所（マルシャンスク、バルハシ、

ブカチャチャ、アングレン、クラスノヤルスク、ウラシムア、ベグワード、スレテンスク「バレー」へ抑留となりました。

新設師団のため、在満各隊からの転居者、支那派遣軍、独立混成旅団、在満召集者から成っていました。

集成大隊は（以下バタリオンという）一收容所に抑留する単位である。この一バタリオンを形成するのに幾つかのカンパニー（中隊）に区分してあり、実際に労働現場で作業に就労する最終単位は三十―五十人のセクション（小隊）である。

初めのうちはそうであったが、昭和二十二年代に入ってから現場セクションは十―十五人くらいが一つの単位となった。それは現場事業体からの希望もあり、現地の労働現場に即応し作業推進上小回りがきき、統制がとりやすく、メンバ―の互助友愛がよく保たれ、コマンドも行き届き、労働管理や衛生保安管理もそれなりに順当な運用ができたように思う。

鉄道工事、石炭貨車おろし、金属工場作業、建築土木工事などすべてこのセクション単位で就労した。し

かしこれはあくまで地上作業セクションの場合である。

二、中央アジアバルハシ湖

昭和二十一年四月初め、私のセクシオンはバルハシ市から八十キロほど北東方に離れた砂漠の中にあるというモリブデンシャフト（水鉛鉱山）に派遣となった。私たちはモリブデンについての知識は何もなかった。

現地鉱山に着いてから鉱山管理長官ワシーリフの説明で、刃物を鋭利にする元素で近代化学工業にはなくてはならないもの、戦車、大砲はじめ現代特殊金属発展のため絶対必要な資源である、ということがわかった。それまではバルハシ湖の水平線のかなたに故郷をしのびながら強制労働に耐えてきたが、もうこれで埠頭から煙をたなびかせて出帆して行く定期船の姿も見おさめか、と一瞬の情緒的感懐にふけた。（湖といっても九州が入るくらい大きさがある。）Yセクシオン（山田少尉がコマンダー）も同行することになった。当時五十四人編成だったから計百八人のメンバーが、トラックにゆられてシャフトに向かった。想像もつか

ぬ魔の地下洞窟が待っているとも知らずに。

三、砂漠の中の金属鉱脈

モリブデン鉱山に日本人が入坑するのは初めてであつて、現地ロシア人労働者は奇異の目をもつて迎えた。敗戦の結果労働力として連れてこられた日本捕虜兵だ。初めて迎える人々の目は、私には二種類の見方に分類されるように見受けられた。

ああこんな遠く離れた砂漠の中に、戦争は終わったというのに、父母妻子のもとにも帰れずに、こんな危険な地下の底に入れられて、いつ落盤で犠牲になるかも知らずに可愛想に……と言っている目と、この日本捕虜兵の豚どもめ、ドイツと手を組んでロシアをウラル山脈から二つに分けて分捕ろうとした、ヨッポイマ―チ、働かせて働かせて死ぬまでこき使つてやる、と叫ぶ目があつた。

この金属鉱山はロシア語で「ウォストーシニ、モリブデン、シャフト（東水鉛鉱山）」といった。金属鉱山としては中規模の鉱山であろう。戦時中に鉱脈が発見され、他の鉱山とともに各地から労働者を集め、強制

移住と仮釈囚人を投入し、急テンポの開発を急ぎ第二次大戦をのり越えた。戦後は冷戦、軍拡時代突入の先鋒を担わせられたのが特殊金属鉱山であった。当時すでに第一シャフトから第八シャフトまであったが、うち四、六、七は掘進中止で、一部科学技師のみが対策を検討していた。最も規模の大きなのは第二シャフトで、鉱山地下ゾーンは五十メートル、百メートル、百四十メートルゾーンの三層が掘進中であった。百四十メートルゾーンはまだ新しく、中心から南北に切り羽が十、二十メートル前後掘削されているのみで、ボーリングされた岩肌は、石英質岩盤の硬質な水晶色に重く冷たくするどく光り輝いていた。

四、鉱粉吸入坑内労働

ナチャーニク・ワシーリフはさらに演説口調で説明する。

「近代科学工業発展のため必要なモリブデン確保のため我が同盟モスクワ政府は当鉱山を国家重要基幹産業に指定した。すでに増産計画は指令されている。諸君ら日本人労働者に期待するところ大である。当鉱山

に負わされた重要な使命を理解し協力されんことを。成績を上げた者には人種、地位（一般人でも、捕虜でも）のいかんを問わず優遇する。モスクワの意向である。増産計画を完遂した暁には、日本人にはそれだけダモイ（日本への帰国）も早まるであろう。」と。日本へ帰りたい我々へのそれは最高の釣りえさであり殺し文句であった。党から派遣された鮮系通訳が日本語で解説した。

けれども、未知なる鉱山の地下入坑することへの恐怖不安に人々はおののき、入坑就労を忌避する者が出た。そうであろう。この私だって地下鉱山は初めてだ。携帯用カーバイドランプ一個を頼りに暗黒の地底の洞窟に下りてゆく気持ちは不安と恐怖の入りまじった何とも形容のしようがないせっぱ詰まったものであった。

坑内の職種は削岩手、梓組手、ズリ手、採鉱運搬手に分けられる。ここまで来てしまった以上はもう引き返されない。行くところまで行くしかない、と私は心に決めた。今思えば若さだったのかもしれない。メン

バー(部下、隊員)を慰撫激励して入坑する私のそばにいた石垣一等兵は妻子ある召集兵だったが、小柄な体を緊張にふるわせ「隊長、大丈夫でしょうね」と心配そうに言う。

一線労働セクションのコマンダーとして私の定位置は第二シャフトと決めた。入坑人員が最も多く、採鉱切り羽、掘進ブロック、生産量が群を抜いて多く、この鉱山全体の代表的シャフトで、生産活動は最も活況を呈していた。

私は入坑してから難関にぶつかつた。陸上の労働現場とは全く作業形態が違う。定点においてチーム全体を掌握指導することは困難であつた。一番離れた場所にある第八シャフトなどは、なかなか掌握できなかつた。これでは怪我人が出てもわからない。私がシャフト在任中の一年四か月の間に、直接この足で第八シャフトを踏み、メンバーの就労状況をこの目で見、保安管理を確かめ本人を激励し必要な注意指導を行ったのは、残念ながら五回ほどであつた。それほど地形的に離れた他シャフトまでの掌握は困難であつた。コマンドの

盲点であつた。チームのリーダーとしての機能は極度に阻害された。後日バケットの下敷きになつて部下メンバーが一人死亡した。それを知つたのは救急搬送されたあとであつた。地下鉱山という特殊な坑内現場は不慮の事故が多かつた。中でも第二シャフトはブロックの範囲が大だったので事故も多かつた。次いで第三、第一、第八、第五シャフトの順に被災者が出たと思つている。鉱山特有の坑内事故は、最も多いのは落盤崩落事故、次いで転落事故だ。がけ掘り切り羽では命綱を胴体に結節しての作業だが、それでもズリ石とともに切り羽から断崖のブロック谷底に転落する例が多い。何せ坑内は主要坑道を除いては、電灯設備なく、切り羽洞窟は暗黒のやみだ。携帯用カーバイドランプ一つの明かりだけが頼りである。ランプの調子のよいときは、ランプを中心として三、四メートル四方は肉眼で視認され、その範囲で作業を進める。しかし、削岩機(圧縮空気で回転する乾式のもの)のみの突端から噴出する圧縮空気とともに吹き出される鉱石粉塵は、もうもうと切り羽洞窟内に充満し、目も鼻も白い

粉でふさがり、払い除けてはせきにむせび、たんを吐き出し（唾液と粉じんのまじったもの） ついに口から呼吸する仕儀となり、嘔吐を繰り返し、空腹なるがゆえに吐くものもなく、しまいに黄色い胃液を吐くありさまに泣くに泣けず、男ひとり苦しきもだえて身に迫る苦痛をこらえるのみでありました。一瞬くらぐらと目まいを感じ、こんな苦しみをするくらいならいっそこの真つ暗やみの断崖に身を投じて楽になった方が……と何遍思ったことか。八時間の入坑労働時間の間、休息も昼食もなく、ただ悪条件と闘いノルマ遂行に汗を流すだけであった。

作業を終えて地上に上がり、太陽の光を浴びてうまい自然の空気を腹いっぱい吸ったとき、ああ今日も生きていたなアという実感をしみじみ味わい、他の切り羽から上がってきた同僚（鉱石粉じんで頭から全身真っ白になっている。）と顔を合わせ「おいお前も生きていたか」と互いに生存を確かめ喜び合ったものでした。

カントーラ（管理事務所のこと。隣にヘルメット、

道具などを置く部屋がある。）におのおの坑内から三々五々上がってくる僚友メンバーの姿に「お元気か」と励ましねざらい、お互いの無事を喜び合ったものでした。

洗面を終わり、さあ帰営しよう。人員点呼をすれば一人足りない。だれだ、第〇シャフトの川野だとわかる。どうして上がって来ないのだ、このとき初めて私の脳裏に悪い予感が走る。何かあったのでないか。何があつたのか、彼はズリ手をしていたからブロック切り羽からがけに転落したのではないか。落石の下敷きになつたのでは、時間が過ぎても上がって来ないのはどういうことか、悪感につかれたようにカントーラに走る。ナチャーニク（管理責任者）に詰問する。やはり事故被災であつた。なぜ早く知らせないのだ。被害の程度、事故の時間、場所と今被災者はどこにいるのか、見舞い、激励に行きたいと申し出る。しかし返ってくる返事は「今、最善を尽くしている。落盤事故で落下した石の下になり、全身打撲で逃げるひまがなかつたらしい。救出したときは意識があつた。早速臨時

の救急車（トラックで代用）で都市病院に搬送した。十分な処置と看護をしているから大丈夫だ、心配要らない。あとは病院にまかしときなさい。バルハシの病院で不十分ならカラカンダ（カラカンダ州の州都で大病院がある。）病院もある。アルマアタ（カザフ共和国の首都で大病院もある。）には完備された病院もある。最良の医療施設をしているから大丈夫だ、安心してまかしておきなさい。見舞いに行きたい気持ちはわかる。しかしそれはできない。どうしてか、それは私からは言えない。」と。

そばにいた技師長は、あのとときコマンダーに知らせたかったが、坑内の切り羽はたくさんあり、どこに連絡とればよいかわからないので、とり混んでもいたし、人手も足りなかつたので連絡できなかつた、故意に隠したのではない、と弁解した。

これが管理責任者の回答である。その後毎日患者の容態と居ところを確かめてみるが「今その後の容態を聞いているところだ。我々は大丈夫だと思っている。心配ない。いい返事がくると思う。病院医師団は全力

を挙げて治療に当たっている。向こうの病院にはいい薬もある。今に元気になって戻ってくる。コマンダー、ワタノーベン（渡辺）あんまり心配して体をこわすよ、大丈夫だからもうそれ以上心配するな。」と取りなしでくれる。

それが本当なのであろう、と思いたいが、確たる裏づけは何もない。重い気をふり払うように私はカーバイトランプを肩にひっかけ、メンバーの働く地下坑内に急いだ。

五、国家重要基幹産業の陰に

一か月ほどたったある日、第二シャフト五十メートルゾーンで、ロシア人坑内夫アンドレーに会った。彼は削岩手を放棄して組長と激しい口論をし、その後ズリ手をしていた。「ヘーイ、コマンダー、ワタノーベン（ロシア語ではカマンジールという）一服しよう。おれはもう仕事終わった。ここにはだれもいない、おれと君だけだ。」と親しげに言っただが、彼は実は

ほとんど仕事をしていない。無作為の抵抗をしていた

のだ。ズリ手の現場に行くことは行くが、監督（組長）が去ると坑道に出てきたのだ。（主要坑道はところどころ坑内灯がついている。）丸太材は削岩切り羽の足場づくりの架橋材で、ブロック坑道には要所要所に積んである。彼は以前から（といっても一か月半くらい前からだが）の坑内での顔見知りであり、自分の持ち場の仕事を忌避してまで、命令一点張りで過酷な労働を押しつける上司（監督や管理者など特権階級をさす）に反発して、自分の自由な意志を述べ反抗している彼の態度に一種の興味と好感のようなものを私は持っていたので、何のためらいもなく、「それもいだろう」と言って彼と並ぶ格好で座った。うまそうに彼はマホルカ（労働者がのむ刻みたばこ）をのみ紫色の煙を吐きながら「ねえコマンダー、君たちはいつ日本に帰るんだ、日本はいいところだと聞いているが、父母も息子の元氣な顔を見たくて待っているらだろう。」と言う。うん、それはもちろんそうだが、敗戦捕虜が鉱山にぶち込まれるのはやむを得ないが、君はロシア人でありながら何で捕虜と一緒にこんな砂漠の地の果て

の地下に入っているんだ。」「全くだ。おれも捕虜だよ。捕虜と同じなんだ。ありもしないその密告でKGBに逮捕されて、その弁証法的取り調べ理論は、強引に罪人に仕立て上げ窃盗罪で二十年の有罪判決、シベリア流刑、監獄を点々と回され、最低の環境の中で何とか十年生きてきた。やっと仮釈となつて、しゃばに出されたら、早速就職させられて来たのがこの魔の鉱山つてわけさ。おまけにザ・クリータときた。」（ザ・クリータ、閉鎖都市、自由に他都市に行かれない）

アンドレーの話は続く、

「お前は元氣そうだから削岩手をやれときやがる。一日助手にいただけで、こんな被殺人的仕事なんかできるか、とわかつたんだ。冗談じゃねえ、人間は新鮮な空気を吸っているから健康なんだ。この鉱山は坑内のどこに行つても粉塵が充満して三メートル先も見えない。こんな鉱粉の密閉された洞窟の中で毎日石の粉を吸つてたらどうなると思う。」おれたちも逃げ出したいのだが、逃げれば銃殺だ。軍事捕虜の悲しさだ。」「三か月持つ体も一か月で終わりだ。あんたたち日本

人はよく頑張っていると思う。命あつてのこの世の中だよ。体が一番大事だ。おれもまだ若い、独身だ。かわいいロシア娘とも恋もしたい。こんなところで参つていられない。」そのとおりだ、おれもそう思う。捕虜の身が悲しい。「アンドレーはさらに続ける。

「コマンダー、たばこももらったから言うわけじゃないが、同じ坑内で危険な境遇と闘ってきた仲間だ。すべてを許し合つた親友だ。カントーラ（鉱山管理長官のいる事務所本部を指す）では口どめしているが、一般労働者はみな知っている。ひと月前に日本人が落盤事故で死んだ。かわいそうにおれが助けに駆けつけたときは鉱石を真つ赤に染めてぐつたりとなつていた。かすかに息はあつたようだが、病院までもつかどうか、残念だがおれは正直なところだめだと思う。大丈夫だ心配するな、と取つてつけたようなお世辞で慰められているらしいが、まだまだほかにたくさんある。日本人は人がいいね、疑うことを知らない。おれも昔はそんなところもあつたが、だまされて罪人に仕立てられ監獄で四人生活でいじめられればなくなる。かえ

つてそれが正しいと思うようになる。自分は自分で守るしかない。おれは生き方を決めた。おれはここにはいなくなるだろう。どこにいてもここよりはましだ。

コマンダー、では体を大事にしな、お互い頑張ろうぜ。」と言つて、片目をつぶつてニツと笑いを浮かべ、肩をすほめるゼスチューアーをした姿が忘れられない。

シベリア流刑地の地面をはいまわつてきた囚人労働者の善意の本心に触れた思いがした。それから何日もたたぬうちにアンドレーの姿はこの鉱山から消えていた。おそらく労働刑法の罪名で告発され遠い監獄へ連れて行かれたのであろう。モリアデン鉱石の粉じんを腹いっぱい吸わされて廃人になるよりその方がよいのだ。

当時のシャフト日本人の入坑就労配置は次のようになっていた。まず百八人を三つの組に分けた。一つの組は三十五〜三十六人となる。入坑時間は

- 一組、日中就労、午前八時〜午後四時、一番方
- 二組、中夜就労、午後四時〜午前零時、二番方
- 三組、終夜就労、午前零時〜午前八時、三番方

に区分され、この就労区分は一週間ごとに繰り上がってゆくシステムになっていた。

次に人員配置は、例えば私のセクションの場合。

第一シャフト六人、第二シャフト十五人、第三シャフト八人、第五シャフト三人、第八シャフト四人、計三十六人であった。

初め、先輩坑内夫（ロシア人、カザック、キルギス、タタール、ウズベク、ウクライナ人）について仕事の手順を習ったが、一週間、十日と日を重ねるうちに、日本人の仕事の段取りや方法、早くやって（能率を上げるといふことになる）早く切り上げるといふ気持ち強く持っている日本人は、技術習得や作業推進の要領習得も早く、独自の研究をして二週間もするとはや一本立ちの坑内手が出来る。削岩手、ズリ手、採鉱運搬手とそれぞれの職種を受け持ってみな懸命に働いた。ロシア人組長も一般坑内夫も日本人の作業能力に舌を巻いて驚嘆した。一か月もすると生産量は増大した。例えば第二シャフトを例にとれば、一組で従来百〜百二十トンだったのが、二百〜百六十トンと増産

計画を上回る成績を上げた。一日三組が交代継続入坑就労するので、この三倍の実績を上げている。これはあくまで第二シャフトだけの実例です。

カントーラでは私を見ると笑顔を絶やさなかった。生産が上げれば中央に対してワシリーフ長官以下の幹部連の株が上がるわけだ。

しかしその反面、反対現象が起こってきた。

一月、二月と過ぎると、以前から入坑稼働していたロシア人坑内夫が目立って姿を消し始めてきた。どうしてだろう。一日一日と入坑稼働労働力が減ってゆく。入坑人員が減ればそれだけノルマを達成するには勢い我々日本人入坑者の労働力にかかってくる。

過重な労働はますます過酷になるばかり。ロシア人労働者もこの鉱山坑内労働をきらっていたことは確かである。落盤事故の危険におののきながらの鉱粉吸入労働は、いずれは廃人（珪肺特有のような病者となり生けるしかばねとなる。）になる運命が待っている。

— 使い捨ての人生。ポロポロのぞうきんになってこの世から消えていく人生。ロシア人でなくてもだれでも

嫌です。ある者は病氣、衰弱を訴えて就職替えしたり、ツテを求めて転出、またある者は上司に反抗し、作業命令を無視して怠業、職場離脱の手段に訴えKGB(国家保安委員会)に連れ去られる者などが続出した。

入坑当初三十六人だった一組(私のセクション)でしたが、八か月後の十一月(昭和二十一年)には二十四、二十二人に減っていました。十人強の減員です。二組も三組も同じような状態でした。三割強の減員率です。戦時中最前線にある軍隊がその三割強を減損した場合は、全滅に等しいといわれていた。産業経済活動の場合同一視はできないが、兵力すなわち労働力がこれだけ減耗すれば、いかに誠実勤勉な日本人でも、ノルマ達成のため肉体を酷使し疲労衰弱はその極に達していた。

もちろん、その間ロシア人労働者が入れかわり立ちかわり就職して来ることは来たが、一週間もすると来なくなる。カントーラ側(鉱山管理局、当局側のこと)も労働力維持に困却低迷の中、打開対策に頭を痛め、各種労働条件を改善取捨選択したが、根本的なものが

解決されない限り、さしたる実効は上がらない。

我々日本人セクション三割強の減耗は、私の分析では次のごとくである。

百八人×〇・三三〥三五・六、この三十五人のうちの七割、すなわち三五・六×〇・七〥二四・九、二十五人が坑内事故(落盤、落石、崩落、転落、その他の事故を含む)に被災し、救急搬送され都市病院などの収容医療施設で最善の手当てを受けている。しかし、前述のごとく被災重症者のお見舞いにも行けず、この目での確認はできず、今でも残念に思う。この被災重症者はその後、原隊に戻った者なく、治ったものか死んだものか全く不明である。最善の手当てをしているから大丈夫だ、心配は要らない、とカントーラ側の一方的な説明だけでは真実はやみの中に消えている。

あとの三割(三五×〇・三〥一〇)の十人は掌握できる。坑内事故に被災負傷しても、救急搬送に至らない比較的中程度のもの(収容所内の医療室で手当てできる)や、疾病、衰弱(栄養失調や神経衰弱、恐怖による精神傷害など)者であり、休養病棟で静養の後他

の陸上作業セッションへ編入替えとなったものである。

前記二十五人（重症被災で救急搬送されたもの）は残念ながら消息不明であり回復生還を願うもの切なるものあり、その後の諸般の情報から、死亡せしものと推定せざるを得ない。

坑内落盤事故に被災して救急都市病院（バルハシ外科病院）に搬送、医療手当を受けた秋保松次一等兵（宮城県出身）は第二シャフト粹組手兼ズリ手であったが、作業中突然切り羽天井から巨大な鉱岩石が落ちてきて、避けるひまもなく下敷きになった。あつという間の出来事だった。（全身打撲、特に左肩左腰部、左大腿部骨折の重症であった。）「気がついたらバルハシ市の外科病院だった。身動きできず寝たままだったが三か月でやっと立てるようになった。打ちどころが急所をはずれ、不幸中の幸いで一命はとりとめた。周囲がみなロシア人ばかりで心細かった。言葉が通じなくてどこに連れていかれるかそればかり心配していた。歩行困難なので無理と思ったが、別の病院に移されたら

日本に帰れなくなると思い、このバルハシにいるうちに日本人のいる収容所（バルハシ第三十七のこと）になんとしても帰らなくては、と毎日院長や婦長に、大丈夫だからラーゲルへ帰してくれ歩けるようになるから願いを聞いてくれ、と無理に元気なところを見せて（ゼスチュアも大きくして）頼んだので、院長が根負けして一歩しか歩けない私をラーゲルに帰してくれた。収容所の休養病棟に帰ればこっちのもの、日本人の中に帰れてこんなうれしいことはなかった。あのままロシア人の中にいたらどうなったかわからない。日本に帰って来れなかったと思う。」と述懐している。

この例は、命をとりとめて日本人収容所に帰れた実例である。もしも他の都市病院で死亡していたら、日本人収容所には遺体は戻らない。病院で解剖して処理してしまうので、第三十七収容所裏の日本人墓地には埋葬されない。

こう考えてくると前述の事故被災者二十五人はどこへ搬送され、どうなったのか全くわからない。秋保氏の事故は昭和二十二年三月の被災だから、この二十五

人の中には入っていない。

昭和二十一年十二月三十日補充増援隊が到着した。同じカザフ共和国内のジスガスカンから第十五バタリオン、第十六バタリオンの半分計千五百人が移動して来てバルハシに併合した。このジス部隊は満州奉天で編成された輻重隊、工兵隊を主力とした集成大隊である。早速鉾山チームが改編され、鉾山管理部が所望する十分な労働力が整備され、翌二十二年正月から充実した鉾山セクションとなって就労した。

私は二十二年までモリブデン鉾山の日本人リーダーとして引き続き通鉾入坑していたが、思えば余りにも被災犠牲が多かったので（反面生産性は上昇したが）、鉾山カントラ側上層部も、人命尊重の観点から発想を大転換せざるを得なかったのではないかと思つています。

そのメーンは、入坑時間を短くすればそれだけ坑内事故（災害も、人為的事故も含めて）、被災の割合も少なくなるとの原理から、二十二年四月から八時間の入坑就労を六時間とし、あとの二時間は入っても入ら

なくてもよい、となった。画期的な大英断である。ただしノルマの引き下げはなかった。従つてノルマを遂行した者は六時間で地上に上がってきた。かえつてその方が、能率的にはいいようであった。

しかし、一部にはそういかない部分もあった。例えば削岩機手のように、機械操作に左右される作業では一定の速度が決まっており、今まで十四本のせん孔を八時間かかつてやっていたものを六時間でやるには、硬度な石英鉾岩に対しては技術的にも科学的にも問題があり、大抵の削岩手は今までどおり八時間削岩作業にかかつていた。

このため日本に帰国後、昭和三十年代に入つて珪肺（当時はまだ病名不明だった）症状増悪進症して息切れ、せき、たん、焼けるような胸の痛み、酸欠発作に苦しみ衰弱、呼吸不全などで死亡していった。

このような僚友メンバーに元削岩手が圧倒的に多かつた事実にも照らしても、うなづかれるであろう。チームのコマンダーとしてリーダー職を続けた私も、危険なズリ現場や削岩、枠組みの作業と、保安指揮のため

現場に充満する鉍粉を呼吸し続ける仕儀となるは立場上当然のことで、鉍粉を吸い続けた私も、ただいまではシベリア珪肺症に苦しみ続け、通院闘病生活の毎日である。前述の秋保氏と金子直治氏（高知県出身）対馬忠雄氏（青森県出身）はいずれも削右手をした人で、私より進症度強く闘病対症の生活に明け暮れております。全国のシベリア珪肺羅症兵は現在判明分百九十人。ソ連領内数十か所の鉍山に投入、鉍粉吸入労働を余儀なくされた抑留兵は約五万人と推定され、珪肺羅病を自ら知らず、言われるまま、肺結核や気管支炎などの病名を付せられて、真の病名とその原因を知らぬまま死亡された人々が大半ではないかと思っています。

このシベリア珪肺を発見され学問的に立証したのは、鹿児島大学名誉教授縄田千郎医博です。同医博を囲んで全国シベリア珪肺連絡協を東京に設立して（事務局長、山本泰夫氏、ブカチャチャ鉍山入坑）シベリア珪肺罹症兵相互の連絡医療対策に献身している。

六、犠牲悲し死所不明の戦友

シベリア珪肺と闘う我々には、戦後はまだ終わらな

い。バルハシの彼の地にて「日本に帰って死にたい。おれと一緒に日本に連れて帰ってくれ。」と病床で叫んだ衰弱した僚友の声、いまだ耳に残り、哀惜の情新たに増す思いである。凍土に残してきた僚友の思いを至せば、流涕さらに荒く、慟哭の思いである。バルハシ第三十七收容所裏（ソ連兵が時々小銃射撃をしていた荒れ野）の上に土まんじゅう式に土を盛り上げて埋葬してきた五十一体の僚友は、置き去りにされた思いを恨み安眠できぬ歳月を送っているのではないかと思えます。しかし、この墓地にはシャフト犠牲者はいない。

当時は十分な器具もなくスコップで土を盛って墓としたが、そこはバルハシ金属工場の大量の工場排水を放出排せつするダンパーに続いており、昼夜ひっきりなしに放出する毒物含有の排水が、長蛇のごとく流水蛇行して荒れ野を洗い、土が崩れ墓標が倒されるので、有志篤志家たちが休日に関の休息を割いて道具を持って集まり、土を寄せ集めては盛り上げ一応お墓のよくな格好にはしてきたが、これと完全なものではな

く、本当に間に合わせ的なもので今はどうなっているか、そのままになっているか、まことに気になるくらいであります。

今までお話ししてきた中で、私が一番気になっているのは、シャフト事故に被災して知らぬ間に（みなそれぞれがほりとんどである。）都市病院に運ばれ、応急医療をされた部下メンバーがその後どうしているのか。死んだのか、生きたのか。転送収容された他の都市病院（州都カラカランダや首都アルマアタ）で治療の甲斐なく死亡したのか、あるいは手厚い救護医療の結果一命を取りとめ回復したものなのか。バルハシにいる間待ち続けたが、ついに何の沙汰もなかったのが残念でなりません。ロシア人労働者たちのうわさ話を漏れ聞くところでは、カントーラから「カラカランダの大病院に送ったから大丈夫だ」という話が出るときは、それは儀礼的言葉であって「もうだめだ」「それほど重症であった」ということであって、入坑就労者への恐怖感、心理的動揺を嫌って、即死状態であっても絶

対死んだとは言わない。鉾山カントーラからは被災者が死亡したという発表は、今まで一度も聞かされたことはない。

「大丈夫だ、大病院に送ったから、立派なドクトルと設備も薬もたくさんそろっているから心配ない。」というのが決まり文句であった。

冷静に考えてみれば、ヘリや航空機で搬送するならともかく、数百キロ離れた州都カラカランダ市や首都アルマアタ市までトラックか貨車で運ぶにしても、当時のくらの時間がかかったものであろう。急いでも一―二日かかるのではないか。重症患者がそれまでつか疑問である。ロシア人労働者たちが言ううちまたの流言（確たる根拠はない）「カントーラがカラカランダに送ったから大丈夫だ、心配要らない」という気休め言葉は、死を意味する代名詞のように解釈（以心伝心、暗黙のうちになんが了解する）されていた。それが本当だとすれば、思いたくないが我々日本人チームの被災者たちはみな助からないことになる。そしてその遺体はどこでどうなったのか、未だに不明である。母

体であるバルハシのバッテリーにも帰されてもいないし、その通知もない。

では、このような正規のルートからそれてしまったものはどうなる。日本側軍医もない所属母体から離れた、周りがロシア人ばかりの中に放り出されたら、だれがこの人は日本抑留兵のただだれだと証明するのか。臨終に立ち合ったロシア人ドクトルも死亡診断書に何と書くのか戸惑ったに違いない。所属収容所にも何の通知もないということは、臨終立ち合い医師の判断で無名の死体としてその地の無名墓地に埋葬される道しかない。だれも知らぬ死者は、無名の行旅病人のように、身元も氏名も不明のまま事務的に処理されてしまうのでないか。

我々バルハシ第三十七収容所には、新京で集成第一大隊が編成されたとき以来大隊付軍医として医療面でお世話になった大橋軍医中尉という人がいた。ある日私に「我々の手から離れた者はどうなるのかは全くわからない。渡辺君、君のメンバーはなるべく日本人の集団から離れないように注意すべきだ。」これは私の

セクションがモリブデン鉱山投入命令を受け医務室で身体検査を受けたときの言葉である。

大橋軍医は復員後厚生省に請われ医療行政の権威として才腕を振るわれました。ダモイ命令下るや、バルハシ収容所での死者名簿の詳細及び最終帰還者千人の名簿を、顕微鏡的細文字で仕上げ医療用石けんの中に隠して持ち帰ったので、援護局への報告や戦友会名簿の作成によい学問的証明資料になりました。

このようにソ連抑留の各バッテリーオンごとに立派な軍医がいたので、ソ連のドクトルはかなわないので一目も二目も日本ドクターに敬意を払っていました。収容所内の医療業務は日本ドクターを信頼してまかせ切りで、職員の家族まで診察に来るほどでした。

ですから、日本軍医のいる限りどこの収容所でも、日本ドクターの臨床のもと、死亡者のあつたときは臨終の立ち合い、死亡診断書の作成など、日本医師団の主宰で行われ収容所側へ報告される。報告は所長の決裁を経て公式のルートに載せられ中央に送られる。

七、終わりに

叙上の記述は、日本人が初めてバルハシの東モリブデン鉱山に投入されて（昭和二十一年四月初め百八人が入坑した。）から同年十二月末までの状況をお話したものであります。この期間が最も過酷悲惨でありました。補充増援部隊が到着してから私が同鉱山を追放される（昭和二十二年七月末までの第二期間）までの七か月の期間の事故被災率は少し減少した。今までの苦い経験と保安対策の強化と入坑時間の短縮は大きな効果をもたらしたと思う。防災対策実施規則により坑内ブロックの安全査察チームを編成し、各カントーラ所属の専門技師が巡回強化し、特に岩盤亀裂の調査と危険箇所を排除を徹底し、被災を未然に防ぐ専門的指導努力を推進したので、死傷率は少なくなりました。

しかし、前述の文中にある秋保松次氏（第二シャフト枠組手であった）の落盤被災があつたように（昭和二十二年三月発生）事故は依然としてありました。

同年七月末、棧橋事件という不祥事が突然起こり、私はその責を負って処罰を受け、カラカランダ刑務所送りとなる。第三バタリオンコマンダー（佐田老

大尉、島根県出身）の嘆願運動とコムラード所長の意見上申（それまでのモリブデン生産高を向上させ重要産業に貢献した功により罪一等を減じられたし、と）との強い弁護支援により、身柄もらい下げとなりコムラードラーゲルの重営倉入りとなりました。このためモリブデンシャフトは追い出された形となりましたが、反面私個人としては、部下メンバーを置いて自分だけ鉱山から逃げ粉塵吸入労働から免れたという後ろめたさを感じましたが、個人の力ではどうすることもできない情勢で、冷たい営倉のコンクリート床を見詰め、謹慎禁錮に甘んじなければなりませんでした。

この第二次期間中は、坑内の被災発生も以前より下回り、二分の一に減少していると思う。

何といつても一番安心で力強く思ったのは、補充部隊が来て収容所の人員が倍増したため、シャフトメンバーの交替チェンジができるし、衰弱、疾病（軽傷者も含んで）、軽傷者が出て補充配置替えができたということでした。

私が鉱山をおりた後の第三次期間は（昭和二十二年

八月から二十三年九月まで）ポストーシニシャフトカ
ンパニー（東鉱山派遣駐在作業中隊）として人員増強
して現地に移住し、坑内セクションのほかに地上作業
セクションも増設され、日本ドクター（バルハシ本隊
から軍医と衛生兵を派遣した）も常駐し医療を担当し
たので、医療、健康衛生面は面目を一新した。

当時は顧みると、今申した第一次期間が最も労働面
でも保安衛生面でも過酷辛惨を極めた時期でありまし
た。常駐のドクトルなく病院設備もなく、ただ働くだ
けの、生産を高めるだけの安全を無視したものでした。
もちろん厚生文化面などは何もなかった。事故被災し
た部下メンバー諸氏は、いずれかに搬送され、消息を
断っております。

また第二次期間に入ってから、被災数は減つても、
やはり事故発生は絶えず、コマンダーの知らぬ間に搬
送処理された被災者は少なからずあると思つている。

人間が自分の私物も自由もすべてを奪われ、精神と
肉体両面で明日をも知れぬ極限状態に至ったとき、一
体何を求めるか。

「日本に帰りたい、おれを残して行かないでくれ、
一緒に連れて帰ってくれ：：」と叫んだ妻子ある病兵
の声。

「おふくろのつくったばたもちを食つて死にたいな
あ」と石の下敷きになつて切り羽を血に染めた若い独
身兵。それらは何を言わんとしているのか、その心の
うちを読み取れるような気がする。

そして、そのことが今のような平和な時代に、物の
あふれた自由な時代において、「人間が一番大切にす
べきものは何か。」を考える上でのよい教訓になると
思います。

忘れ去ることのないシベリア抑留

新潟県 高野 広一

人は思い出に生きるといふが、この言葉が痛切に身
にしみるほど年輪を重ねてしまった。人それぞれいろ
いろな思い出があると思うが、私にとつては生涯忘れ